

異文化との共鳴：エルサルバドルでのオーケストラ指導

松永孝春／エルムハースト大学助教授、指揮者

日本から米国・シカゴに移住して以来26年、一貫してクラシック音楽業界に身を置いてきたが、2024年の夏、人生で初の中央アメリカ・エルサルバドルの首都、サンサルバドルで指揮をする機会を頂いた。同国文化省が設置、運営する「サンサルバドル青少年合唱オーケストラシステム（*Sistema de Coros y Orquestas Juveniles de San Salvador*）」並びに、同音楽学校の教員によって運営される「エルサルバドル室内楽協会（*Sociedad de Música de Cámara de El Salvador*）」より、この夏に創設された音楽祭のオーケストラの客演指揮者として招かれたのだった。私の勤務する大学の作曲と音楽理論を教える同僚も今回共に招かれ、彼の新曲等を現地で初演することとなった。



サンサルバドルには一週間の滞在となり、6月3日の月曜日から5日間のリハーサルを重ね、8日の土曜日に本番を行うスケジュールだったが、それに加え、前述の音楽学校でのバイオリンの個人レッスンとマスタークラス（公開レッスン）も請け負うこととなり、シカゴから自分のバイオリンを持参したのだった。私の本業は指揮だが、元々はバイオリン弾きである。

そして私は初日から、まったく予想もしなかったカルチャーショックの連続に遭遇するのである。

初日の月曜日はバイオリンのマスタークラスから私の指導は始まったのだが、当地の政府設置の音楽学校といっても建物には窓はなく鉄格子のみで、しかも猛暑にも関わらずクーラーも無く、私や生徒達は、サウナのような部屋で汗だくになりながら、しかも鉄格子しかないので、外の道路の雑音がもろに入ってきて、彼らはアメリカや日本では到底考えられない何とも劣悪な環境で音楽を勉強しているのだった。



た。しかも、彼らの大半はレッスン代を払える家庭環境になく、教員達は政府から収入の補助を得ているらしいのだが、中には、その教室まで通うバス代も捻出できない生徒もいるようで、そういう時は、教員が自腹でバス代の数ドルを生徒に手渡しているそうである。楽器も、およそまともな状態のものではなく、安物の量産製の楽器を弾いていて、高度な技術の指導には向かない代物であった。



しかし、私が本当に驚いたのは、そういう物理的困難ではなく、生徒たちが実に真剣に、与えられた環境の中でひたむきに音楽と向かい合い、そして結構な演奏レベルに達していることだった。中には、「将来アメリカに行って音楽をもっと勉強したい」と私に目を輝かせて片言の英語で語っていた生徒も何人かいた。これは、当地には音楽大学が無いためだが、エルサルバドルは30年ほど前まで戦争があり、また増大するギャングの問題や貧困の連鎖でまだまだ発展途上にある。彼ら若い世代がそんな現状から今まさに必死に脱皮しようとしている現実を垣間見て、この国の芸術文化

の振興は、10年20年後には、きっと彼らが中心となって一定の実を結ぶ段階になるのであらうと肌で感じた。彼ら一人一人の眼の奥に輝く明日への希望と強い向上心、そして音楽への深い愛情は、世界の音楽教育の最先端に行く高度な資本主義社会に生きるアメリカの生徒たちが見失いかけている音楽を学ぶという本質を鋭く突いており、今年五十路を迎えた私自身も深く考えさせられる一週間だった。



来年も、きっとまた彼らのもとに戻って、熱い一週間の音楽づくりに没頭したいと今から楽しみでならない。

御礼

土曜日のコンサートは盛大に行われ、特別ゲストとして在エルサルバドル日本国大使館より星野芳隆大使をはじめ、文化担当の方々がお越し下さり、オーケストラのメンバーは彼らのサポートをととても喜び、また勇気づけられた。直前の打診、要請であったにもかかわらずコンサートへのご出席をご快諾頂いた大使御一行様に、この場を借りて深く御礼申し上げたい。今回の私の当地での音楽指導が、日本とエルサルバドルの友好と友情の手助けになってくれれば、それは望んでもいいなかったことで、こんなに嬉しいことはない。



松永孝春（まつなが たかはる）／指揮者

エルムハースト大学音楽学部助教授（指揮、管弦楽演習）／米国・シカゴ
バーチクリーク音楽祭指揮者／米国・ウィスコンシン州

2021年、コンダクター・オブ・ザ・イヤー（イリノイ・オーケストラ連盟）受賞

2019年、アメリカン・プライズ指揮者部門第3位受賞